

イブン・ムバーラク『禁欲の書』解題・翻訳ならびに訳注

東長 靖*

1. はじめに

およそ研究の進展にとっては、一次資料の精確な提示（校訂・翻訳やフィールド・データの公開・蓄積）とその緻密な分析が必要であるが、これと並んで、次代における研究の発展のためには、すぐれた概説書が書かれると同時に、なるべく多くの一次資料が母語で読めることが重要である。

本シリーズは、スーフィズムの古典と言って差し支えない原典を順次取り上げ、そのさわりの部分を翻訳するとともに、簡単な解題と訳注を付すものである。このささやかな試みが、スーフィズム研究の裾野を広げる一助になることを願う。

取り上げる文献の選定は、本稿の筆者が行った。この際、スーフィズム研究史上著名な著作を基本的に選択したが、一部にはより注目されるべき著作と筆者自身が判断するものをも含めることにした。

筆者は現在、京都大学において、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科および文学部・大学院文学研究科の学生を対象として、スーフィズムの原典をアラビア語で講読する科目を担当している。また、スーフィズムに関する読書会をこれまで断続的に開催してきた。本シリーズで取り上げる著作の多くは、これらの機会に俎上に載せたものであり、各々の参加者からの貴重な意見が反映されている場合が少なくない。もちろん、本稿の最終的な責任は筆者にある。

ここには、その第1回として、スーフィズム成立に先立つ時代に見られたズフド（禁欲主義）について主題的に論じた文献の一部を取り上げる。スーフィズムの通史を描く際、9世紀半ばごろまでを、スーフィズムの前段階である「禁欲主義」（ズフド [zuhd]）の時代とすることが多い。この時代以降に書かれた数多い『禁欲の書』の中から、最初期の著作の1つであるイブン・ムバーラク（181/797年没）のものを選び出して翻訳した。

2. 解題

1) ズフドについて¹⁾

8世紀半ば以降、イスラーム政権が世襲化・王朝化していくなかで、宗教的エートスを見失った皮相的なムスリムの生き方を嘆き、信仰と実践の浄化を訴える人々が活動した。彼らの主張は特段神秘的なわけではなく、欲望の節制を主眼としていた。これをズフドと呼ぶ。ズフドの原義は、身を慎むこと、節制であるが、この語はしばしば「禁欲主義」と訳され、スーフィズムの前段階を表すとされてきた。

しかし、ズフドについて実際に書物を残した人々の名前を仔細に検討してみればすぐに気づくところ、アフマド・イブン・ハンバルら、スーフィズムと必ずしも直結しない人々が担い手であることが少なくない。これらの書の多くは、スーフィズムを含むイスラーム諸学が思想として析出され

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
京都大学イスラーム地域研究センター副センター長

1) ズフドに関する最新の知見を要領よくまとめたものに、[Cobillot 2002] がある。

てくるより前、もしくはその過程とほぼ同時期に執筆されているため、スーフィズムの先行形態だ
という思い込みは、まずは捨てるべきであろう。後代の法学の立場からも、神学の立場からも、こ
の時代の運動はある種の塑型となるものと言えよう。現在のイスラーム主義者たちが、自分たちの
思想の先行形態だと主張することも可能な内容を、それは持っていると考えられる。イスラーム的
価値としてのズフドはイスラーム教徒全体に共有されていると考えるべきである²⁾。

とはいえ、スーフィズムの成立にズフドがまったく関係を持たなかったなどとは考えにくい。た
しかに、ズフドはスーフィズム成立の要因の1つであったと思われる。確立後のスーフィズムの立
場からは、ズフドは、修行の途上で求められる現世放棄・禁欲を意味するようになる。ただし、前
代にそれ自体が目標とされたズフドは、もはや究極目標ではなく、さらに高い境地を目指すべきも
のとされたのである。

2) ズフド研究について

ズフド研究は、意外に進んでいない。先行研究としてはまず、ズフドの意味を論じた [Kinberg
1985] につくべきであろう³⁾。彼女は、1世紀のザーヒド(禁欲家・禁欲主義者)に仮託されたこ
とばを分析することにより、「ズフド」という概念を分析する。彼女は、ズフドの定義を、一般的、
特定の2つに分ける。前者は、神でないあらゆるものを放棄することを示すが、具体的にどうす
るかの指示はないとする。これに対して後者は、より簡潔にしか説明されないが、逆にどう行動す
べきかという指示をはっきりと述べる。後者はさらに2つに分けられる。その第1は、ズフドの目
標を扱う定義であるが、ここでは、A. リダー (riḍā', 満足)、B. タワククル (tawakkul 神への絶対帰依)、
C. キサル・アル＝アマル (qīṣar al-amal, 短時間 [今この瞬間] への希望) としてズフドは定義され
る。第2は、ザーヒドに目標への到達の仕方を示す定義であり、これはズフドの世界に対する態度
を扱った定義であるが、ワラア(綿密さ、誠実さ、良心の咎め)を通してズフドを定義していると
する。これを主として分析することにより、論文の筆者は、ズフドをスーフィズムの一部としてで
はなく、イスラーム社会の日常生活における倫理を表すものととらえるべきだと説いている。

なお、禁欲主義そのもの、およびそれと神秘主義の関係は、より広い宗教学的考察の対象ともなっ
ている。これについては、[Mueller 1973] を参照されたい。

3) 『禁欲の書』について

ズフドの書(もっとも一般的に用いられている用語を用いて、禁欲の書と呼んでおく)は歴史上、
数多く書かれてきた。アミール・アフマド・ハイダルという研究者は、バイハキー(458/1065年
没)の禁欲の書の校訂に付した序文の中で、ズフド、ワラア(wara'), ラカーイク(rāqā'iq, 徳行)(そ
れらの意味領域はほぼ重なりと考えられる)を題材に書かれたものとして63の著作に言及してい
る [Bayhaqī 1987: 47-56]⁴⁾。近年も少なからぬ刊本が出されており、それをイスラーム思想の観
点から検討する必要がある。たとえば、イブン・ムバーラク(181/797年没)、イブン・ダッハー
ク(211/826年没)、アフマド・イブン・ハンバル(241/855年没)、イブン・アビー・ドゥンヤー
(281/894年没)、ムハンマド・イブン・ズィヤード(340/951年没)、ジャアファル・フルディー

2) 上述の [Cobillot 2002] も同様の見解をとる。

3) ほかに、禁欲主義と神秘主義の違いを主として論じた [Melchert 1996] を挙げることができる。

4) [Cobillot 2002: 560] も、2/8-10/16世紀の著作としてこの数字を踏襲し、その内37作品は2/8-3/9世紀に書かれたものとする。

(348/958 年没)、バイハキー (458/1066 年没) らがズフドの書を著しており、これらはすべて刊本の形で読むことができる。

禁欲の書は、ハディース録の形をとって編まれることが通常である。筆者の見解を明示的に提示することなく、引用のみによって主張を述べるやり方は、ハディースの徒 (ahl al-ḥadīth) に特徴的であり、そういった文脈のなかでこの文献ジャンルは検討されるべきなのかもしれない。イスラーム思想研究において、ズフド研究が必ずしもさかんでないのは、ひとつには、このような形式で編まれた禁欲の書から、筆者自身の思想を抽出するのが容易ではないからであろう。

4) 著者イブン・ムバーラクについて⁵⁾

名前は ‘Abd Allāh b. al-Mubārak b. Wāḍih abū ‘Abd al-Raḥmān al-Ḥanzalī Mawlā-hum al-Marwazī. 118/736-181/797 年。商人だが学問を愛好し、各地を旅して、アブー・ハニーファ、スフヤーン・サウリー、マーリク・イブン・アナス等多くの師について学んだ。法学、ハディース学、クルアーン解釈学、歴史学、アラビア言語学等にすぐれた。ユーフラテス河畔のヒート (Hīt) で没した。享年 63 歳。著書に *Kitāb al-zuhd* (本稿で訳出したもの)、*al-Sunan fī al-fiqh*、*Kitāb al-tafsīr* など。

【解題への参考文献】

- Bayhaqī, Abū Bakr Aḥmad b. al-Ḥusayn 1987. *Kitāb al-zuhd al-kabīr*, ed. ‘Āmir Aḥmad Ḥaydar, Bayrūt: Mu’assasa al-kutub al-thaqāfiya.
- Cobillot, Geneviève 2002. s.v. “Zuhd,” *EF*, vol. 11, Leiden : Brill.
- Ibn al-‘Imād 1979. *Shadharāt al-dhahab fī akhbār man dhahaba*, Bayrūt : Dār al-masīra, vol. 1.
- Kaḥḥāla, ‘Umar Riḍā n.d. *Mu‘jam al-mu‘allifīn: Tarājīm muṣannifī al-kutub al-‘arabīya*, Bayrūt: Iḥyā’ al-turāth al-‘arabī, vol. 6.
- Kinberg, L. 1985. “What is Meant by Zuhd,” *Studia Islamica* 61, pp. 27-44.
- Melchert, Christopher 1996. “The Transition from Asceticism to Mysticism at the Middle of the Ninth Century C.E.,” *Studia Islamica* 83, pp. 51-70.
- Mueller, Gert H. 1973. “Asceticism and Mysticism: A Contribution towards the Sociology of Faith,” *International Yearbook for the Sociology of Religion* 8, pp. 68-132.
- Robson, J. 1986. s.v. “Ibn al-Mubārak,” *EF*, vol. 3, Leiden: E.J. Brill & London: Luzac.

3. 翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、‘Abd Allāh b. Mubārak al-Marzawī, *Kitāb al-zuhd wa yalī-hi Kitāb al-Raqā’iq*, ed. Ḥabīb al-Raḥmān al-A‘zamī, Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, n.d. を底本とした (今回訳出した部分は、40-41 頁)。2006 度の京都大学におけるアラビア語・スーフィズム文献講読で取り上げたものであり、同講読には下記の学生諸君が参加した (敬称略、所属は当時)。横内吾郎、篠田友暁、日野恵美、小倉智史、岩本佳子 (以上文学研究科)、高垣ひとみ、上柿智生 (以上文学部)、黒田賢治、堀抜功二、丸山大介 (以上アジア・アフリカ地域研究研究科)、澤田萌 (大阪外国語大学)。上述したように、これら学生諸君から貴重な意見・示唆を与えられることが少なくなかった。

訳文中、[] で囲った部分は、訳者が説明のために補ったものである。

5) 本項作成にあたっては、[Robson 1986; Kaḥḥāla n.d.: 106; Ibn al-‘Imād 1979: 295-297] を参考にした。

イブン・ムバーラク『禁欲の書』「哀しみと嘆きに関して述べられたことの章」より

123.

アブー・ウマル・イブン・ハイヤワイヒ⁶⁾とアブー・バクル・ワッラーク⁷⁾が汝らに伝えて曰く、ヤフヤー⁸⁾が我々に伝えて曰く、フサイン⁹⁾が我々に伝承して曰く、イブン・ムバーラクが我々に伝えて曰く、ムバーラク・ブン・ファダーラ¹⁰⁾がハサン¹¹⁾から伝え聞いたこととして我々に伝えて曰く、アッラーの使徒——アッラーが彼を嘉したまいますように——は言われた。「現世は信仰者にとっては牢獄であり、不信仰者にとっては楽園である。」[このようにムバーラクは]言った。またハサンは言った。「神かけて、まことに、[現世]の中では、信仰者は哀しむ者となる。」アッラー——高められ、威厳をいや増されんことを——から、また、現世から出ることが[まだ]その身に起こっていないのに火獄に落ちてしまう[ことをあれこれ言う]ことについて、伝承されているのだから、どうして信仰者が哀しまないでいることがあろうか。神かけて、まことに、[人は]病気や災厄や自らを責め苛むものごとに出会い、まことに、不正を働き、勝利を得ることがない。こういったことから、アッラー——高められ、威厳をいや増されんことを——からの報奨を求める。[しかし] [現世]においては、哀しみ、畏れるばかりであり、それは[現世]を離れる時まで続くのである。そうして、[現世]を離れる時になって[ようやく]安楽と栄光に至るのである。

124.

アブー・ウマル・イブン・ハイヤワイヒとアブー・バクル・ワッラークが汝らに伝えて曰く、ヤフヤーが我々に伝えて曰く、フサインが我々に伝承して曰く、イブン・ムバーラクが我々に伝えて曰く、スフヤーンがマンスールから伝え聞いたこととして、また彼はサーリム・ブン・アビー・ジャアドから伝え聞いたこととして我々に伝えて[曰く¹²⁾]、「マルヤムの子イーサー——アッラーが彼を嘉したもうように——は、『舌が秘密を守り、家がゆったりしており、自らの過ちを嘆く者に祝福あれ』と言われた。」

125.

アブー・ウマル・イブン・ハイヤワイヒとアブー・バクル・ワッラークが汝らに伝えて曰く、ヤフヤーが我々に伝えて曰く、フサインが我々に伝承して曰く、イブン・ムバーラクが我々に伝えて曰く、ムスアルがアブドゥルアラー・タイミーから伝え聞いたこととして我々に伝えて曰く、「涙を流すことのない知識を、[それに] ふさわしいもの[であるが] ゆえに与えられた者は、役に立つ知識を与えられないことがあろうか。なぜなら至高なるアッラーは、知識を与えられた者たち¹³⁾を

6) ハディース学者。295-382 年。Abū 'Umar Muḥammad b. al-'Abbās b. Muḥammad Zakarīyā b. Mu'ādh al-Baghdādī.

7) ハディース学者。293-378 年。Muḥammad b. Ismā'il b. Muḥammad b. al-'Abbās al-Mustamlī al-Baghdādī.

8) ハディース学者。228-318 年。Abū Muḥammad Yahyā b. Muḥammad b. Šā'id.

9) ハディース学者。246 年没。イブン・マージャ、ティルミズイーら、ハディース集成の著名人の師の一人。Abū 'Abd Allāh al-Ḥusayn b. Ḥasan b. Ḥarb al-Marwazī.

10) ハサン・バスリーの弟子。

11) ハサン・バスリー。ウマイヤ朝期バスの著名な説教師。21/642-110/728 年。Abū Sa'id b. Abī al-Ḥasan Yasar al-Basrī.

12) akhbara-nā ... qāla, qāla 'Isā となるのが通例であるが、ここでは、qāla がダブるせいか、qāla が一つしかかかれていない。省略されたと見るべきか。もしくは校訂ミスと見るべきかもしれない。

13) 原語は 'ulamā であるが、いわゆるウラマーではなく、ここではクルアーンに基づき、知識を与えられた者、知

描写して、「以前に知識を与えられた者たちは、読誦を耳にすると・・・(中略)・・・涙を流して顔を地に伏せる¹⁴⁾」と言われたからである。フサインが言うには、スフヤーン・ブン・ウヤイナがムスアルから伝え聞いたこととして同様のことを伝えた。

126.

アブー・ウマル・イブン・ハイヤワイヒとアブー・バクル・ワッラークが汝らに伝えて曰く、ヤフヤーが我々に伝えて曰く、フサインが我々に伝承して曰く、アブドゥッラー・イブン・ムバーラクがマーリク・ブン・マゲール（ムゲール）から、彼はある人から、またその人はハサンから伝え聞いたこととして我々に伝えて曰く、「ずっと哀しみに沈んでいることのように、アッラーが服従されることはない¹⁵⁾。」

127.

アブー・ウマル・イブン・ハイヤワイヒとアブー・バクル・ワッラークが汝らに伝えて曰く、ヤフヤーが我々に伝えて曰く、フサインが我々に伝承して曰く、イブン・ムバーラクが我々に伝えて曰く、ムバーラク・ブン・ファダーラがハサンから伝え聞いたこととして我々に伝えたが、彼「ハサン」は「あなた方はこの話を聞いて驚いているのか。嘲笑はしても、泣かないのか」という「クルアーンの」一節を誦んで、次のように言った。「神かけて、このことにおいて最も知恵のある者が、泣く者のためにいるとすれば、これらの心を泣け、これらの諸行為を泣け。なぜならば、男子たる者、まさしく心が耐えておりながら、両目は涙を流すものだからである。」

識をもっている者と考えらるべきである。

14) 17章 107-109節。途中の省略部分や前後の部分も含めて全体を示せば、「(107) (あなた方がこのクルアーンを信じて、また信じなくても) 以前に知識を与えられた者たちは、読誦を耳にすると、必ずその顔を伏せて、サジダする。(108) そして(祈って) 『私たちの主の栄光を讃えます。本当に主のお約束は果たされました』という。(109) 彼らは涙を流して顔を地に伏せ(、謙譲の誠をつのらせ)る。」

15) ずっと哀しみに沈んでいることに比べられるほどの、アッラーへの服従はない、という意味か。